



写真-1 牛ヶ峰山遠望（令和3年5月撮影）

■ 大蛇と洪水の伝説が残る牛ヶ峰山

写真-1 は、新温泉町海上（うみがみ）の児島神社から南へ約 2.5km 行ったところの町道から牛ヶ峰山の方向を撮影したものです。牛ヶ峰山の山腹には、平安時代に発生したと推定される大崩壊※1 を示す崩落崖が今もはっきりと残っています。

地元には、大蛇が大暴れしたため山が崩れて川を堰き止め湖ができたという「大蛇と洪水の伝説」が伝えられていますが、このような崩落崖が残っていると伝説の持つリアリティが伝わってきます。

大崩壊があったことは、図-2 の地形図や図-3 の横断図からも推測できます。牛ヶ峰山の東側に等高線が密になっている急な崖（崩落崖）があり、それに続く緩やかな斜面（崩落堆）が小又川（こまたがわ）の方に押し出されています。



写真-2 牛ヶ峰山の崩落崖

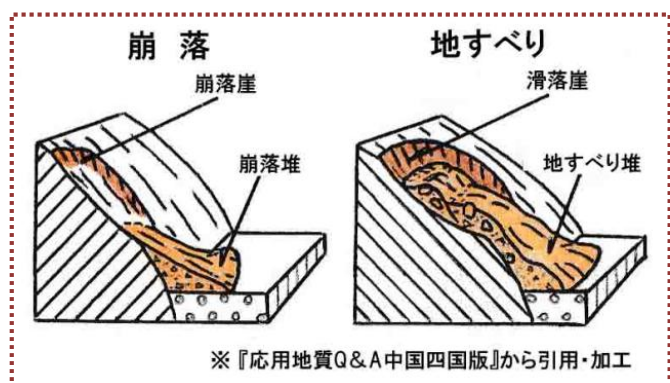


図-1 崩落と地すべりの違い

※1 崩壊（崩落）：斜面の比較的狭い領域の土砂が安定を失って突発的に速い速度で落下する現象をいう。斜面の構成物質が重力の作用によって、低地に向かって移動するという概念においては地すべりと同一のものであるが、土塊の移動速度が速いものを崩壊と呼び、非常にゆっくり動くものを地すべりとして区別している。また、地すべりの発生は、第三紀泥質岩や変成岩、火山変質岩など粘土化しやすい岩質の地域に限られるといった地質特性がある。なお、昭和 51（1976）年 9 月 13 日に兵庫県一宮町（現・宍粟市）で発生した「福知の地すべり」は、土塊の移動速度が速い「崩壊型の地すべり」とされている。

■ 牛ヶ峰山の大崩壊が小又川を堰き止めて湖をつくる ～「海上」という地名の由来

海上地区の北西約 1.5km のところにある牛ヶ峰山（標高 712.8m）は、兵庫県と鳥取県との県境になっていて、牛が寝たような形からこの名があります。この山には、下記のような伝説があります。

昔、牛ヶ峰には大きなお寺が建っていました。ある日、「日の水」という泉まで水を汲みに行った小僧さんが行方不明になる事件が続けて起こりました。調べてみると、小僧さん達は大蛇にひと飲みになされていたことが分かり、寺は大騒ぎになります。

それを聞いた慈覚大師※2 というお坊さんが、「わらで人形を作り、もぐさ※3 をつめ、線香に火をつけ、大蛇が人形を飲みこんだ頃、もぐさに火がつくようにして、泉の側に立たせてみては」といい、そのとおりにすると、大蛇が人形をひと飲みにして行きました。

人々はうまくいったと喜んでいたら、山が地震のように鳴り、崩れ落ちた土砂が小又川を堰き止めました。小又川のそばに住んでいた村の人々は、南の丘の上の森まで這い上がって逃げていきました。

村人の家は湖の底に沈み、丘は小さな小島になってしまいました。家を失った村人は、この小島に家建て、湖の上「うみがみ」と村の名をつけ、森にお宮を造り神様をお祀りしました。そのうち、「湖上」を「海上」と書くようになったとか。山の中なのに「海上（うみがみ）」や「児島」という地名があるのは、こんなわけがあったからだといわれています。

それから何年か穏やかな月日が流れました。栃谷村（現・新温泉町栃谷）一番の分限者（お金持ち）の家に、七美（しづみ：美方郡の東部）の方から若くて美しい娘が奉公に来ていました。

娘の占いがよく当たると評判になっていましたが、ある日「6 月 10 日には大水が出るから、丘の上に集まるように」と言いだしました。人々は半信半疑で丘に集まりますが、天気もよく大水の気配は感じられません。

村人は「はよういんで田んぼの手入れをした方がよさそうだ」と丘を下りようとした時、上流の方から地鳴りが聞こえ、山崩れでできた湖の水が土手を破り、赤土色をした泥の流れが岩を巻き込み石を跳ね飛ばしながら滝のように流れ出し、みるみるうちに家や田畑を飲み尽くしてしまいました。

村人は、すさまじい山津波の跡を見つめながら、命が助かったことを喜び合いましたが、不思議なことに、その後その娘の姿を見た人はいなかったそうです。

今は小又川も狭い谷あいを通り、かつて湖があったとは想像もつきません。

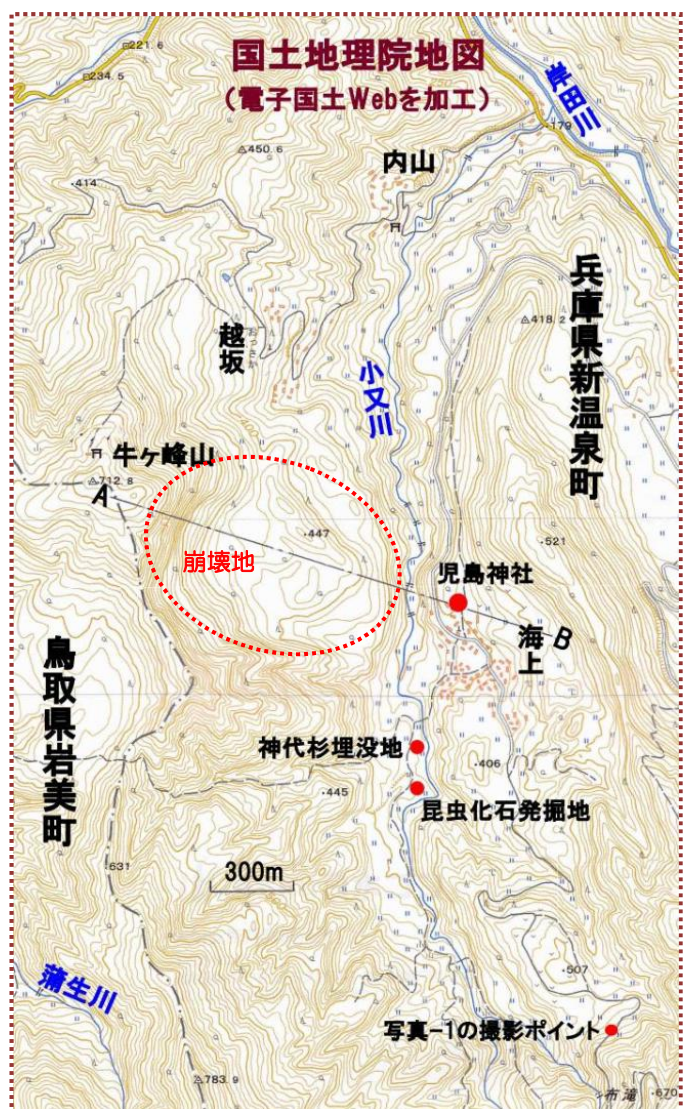
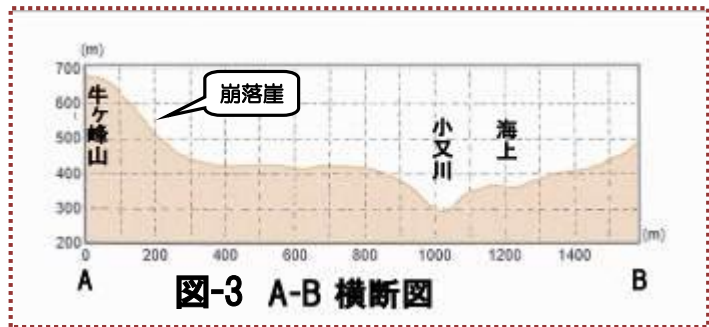


図-2 新温泉町海上付近の地図

これは、大崩壊によってできた“天然ダム”が何年か後に決壊したという話ですが、慈覚大師が登場することから平安時代初期の話と考えられます。また、天然ダムの決壊で大きな被害のあった栃谷村は約 15km も下流の村ですが、そんな下流にまで被害が及んだのでしょうか。

※2 慈覚大師：延暦 13 (794) 年～貞観 6 (864) 年。
最後の遣唐僧として唐に渡り、天台宗を大成させた。朝廷から「大師号」を最初に授けられた高僧で、俗名は円仁。入唐から承和 14 (847) 年に帰国するまでの9年半にわたる唐滞在の記録『入唐求法巡礼行記(にっとうくほうじゅんれいこうき)』は三大旅行記の一つとされる。湯村温泉は、嘉祥元(848)年に円仁によって開湯されたと伝えられることから、円仁が湯村を訪れたのは帰国間もない55歳の頃と思われる。海上の伝説に出てくる慈覚大師の話が事実とすれば、この頃に立ち寄ったものと考えられる。



※3 もぐさ：ヨモギの葉の裏にある繊毛を精製したもの。主に灸(きゅう)に使用される。

■ 海上の神代杉から推測される2度の大崩壊

海上の児島神社にある神代杉(写真-3)は、集落を南から北へ流れる小又川付近から掘り出されたものです。

神代杉は、杉の木が何らかの原因で地中に埋まり、半化石になったもので、海上地区の昆虫化石が多く発見される場所の近くからよく出てきます。地中での保存状態がよく、青黒く変色しているものは、造作に使う高級素材として重宝され、比較的化石化の進んでいないものは、水桶の材料に利用されてきました。



写真-3 神代杉(児島神社にて)

これらの杉は、放射性炭素年代測定※4から約2500年前のものと推定され、実際にこの地で土砂崩れがあって、その時に崩落で埋まった杉ではないかと言われています。しかし、今まで出てきた神代杉には炭化の進んだものとそうでないものの2種類が確認されています。このことから、牛ヶ峰山の大崩壊が平安初期と約2500年前の2回あったと考えられています。

※4 放射性炭素年代測定：自然の生物圏内において放射性同位体である炭素 14 (^{14}C) の存在比率が1兆個につき1個のレベルと一定であることを基にした年代測定方法である。対象は動植物の遺骸に限られ、無機物および金属では測定が出来ない。C14 年代測定のほか炭素年代測定、炭素 14 法、C14 法とも言う。

■ 海上地区周辺の地質について

新温泉町の南部地域(旧温泉町)の基盤岩は、中生代末から古第三紀にかけて形成された酸性火山岩類と、その砕屑岩からなる矢田川層群、およびそれに貫入した山陰型花崗岩からなっています。

山陰型花崗岩類は、浅所貫入型の黒雲母花崗岩と花崗閃緑岩からなり、照来(てらぎ)地域一帯の基盤岩として伏在すると考えられています。

被覆層としては、下位から新第三紀中新世の北但層群、新第三紀鮮新世の照来層群、第四紀の未固結堆積物となっています。

牛ヶ峰山の東斜面に見える崩落崖は、古い時代の巨大な崩壊跡と考えられ、崩壊は東を流れる小又川の方へ滑動していて、崩積土が小又川沿いの広い範囲に分布しているそうです。

この大崩壊の発生機構は、『平成3年度地すべり対策報告書(海上地区)』によると概ね以下のとおりです。

第四紀更新世末の温暖期や寒冷期の繰り返しによって、牛ヶ峰山の主体をなす安山岩表面に亀裂が入り、上昇運動の活発化に伴い安山岩や照来層表面の崩壊が始まります。また、照来層群の侵食が進み谷が形成されます。

牛ヶ峰山東側の斜面において、地震活動や火山活動が引き金となって大規模崩壊が発生し、崩壊した岩塊の一部が谷を閉塞し、背後に湖が形成されます。湖には砂や砂礫が堆積、地元ではこの堆積物を「池なり土」と呼んでいて、小又川沿いに露頭が見られます。この層には杉の巨木が埋もれていることが知られています。



図-4 新温泉町海上付近の地質図

凡 例	
To	新第三紀 照来層群 小代累層 安山岩・玄武岩および同質火砕岩類
Tk	新第三紀 照来層群 春来累層 礫岩、凝灰質砂岩・泥岩
Tt	新第三紀 照来層群 高山累層 流紋岩溶岩および同質火砕岩類
Qv	第四紀 火山岩類 玄武岩・安山岩および同質火砕岩類

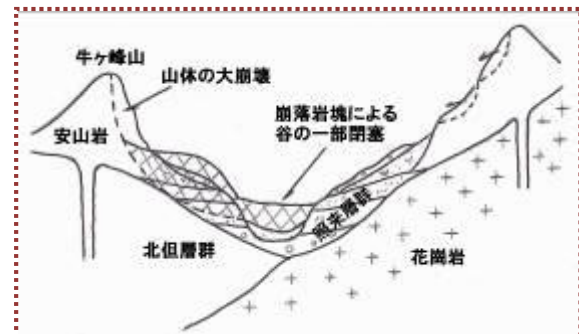


図-5 牛ヶ峰山東斜面の大崩壊発生機構推定図の一部
(『平成3年度地すべり対策報告書(海上地区)』から引用・加工)

■ 上流の小又川溪谷には“兵庫の絶景・シワガラの滝”

海上集落の下を流れる小又川の上流にある小又川溪谷には、“但馬の名瀑”のひとつ「シワガラの滝」があります。近年の絶景ブームに乗って有名になった滝で、休日になると滝の入り口にある数台の駐車スペースは一杯になります。

令和3(2021)年5月下旬の日曜日、快晴だったので牛ヶ峰山を撮るついでに「シワガラの滝」を見に行ってきました。駐車場から滝までは約1km、入り口の看板には「マムシの生息区域につき注意!」とあり、ツキノワグマもいるみたいです。駐車場には車が3台停まっていたので先客がいるなら多分大丈夫ということで、念のためクマ除けの鈴を付け、長靴を履き、カメラバッグを肩にかけて出発、途中の危ない箇所ではトラロープやチェーンのお世話になりながら、30分ほどで無事滝にたどり着きました。

洞窟内に流れ落ちる珍しい滝で、滝との距離があまりとれなくて洞窟の岩壁ギリギリまでバックして、しびれがカメラにかからないよう気を付けながらシャッターを押しました(写真-4)。滝周辺の岩肌は苔で緑色を呈し、イワタバコやオオバギボウシ(多分)が群生していました。そして山道沿いにはタニウツギやシライトソウ、ミヤマカタバミ、チゴユリなどが生え、豊かな植生環境の中、思いっきりマイナスイオンを吸収して帰りました。翌日はもちろん筋肉痛!



写真-4 シワガラの滝



写真-5 7月頃に薄紫の花が咲くイワタバコ



写真-6 オオバギボウシ (多分)



写真-7 ミヤマカタバミ



写真-8 タニウツギ

■ モノローグ

昨年（令和2年）、何気に『但馬の情報誌 T2 Vol.87』を読んでいて、「海上」の地名の由来を知りました。牛ヶ峰山の山腹には「大きくえぐられたような跡」があるというのですが、千年以上前に起きた崩壊跡なので草が生えていて近くまで行かないとわからないはず、と思っていました。でもまあ、とりあえず行ってみるか、ということで、半信半疑で現地に行きましたが、海上の手前付近で木々の間から対岸の牛ヶ峰山の崩落崖が見えてビックリ！今なお明瞭に残っていて思わず「エーッ！マジか」。伝説がリアリティーを持った瞬間でした。

何とか『ひょうご水百景』にまとめようと思いましたが、まずは冒頭の写真を撮らないと前に進めません。小又川は谷底を流れていて、崩落崖は山頂付近、小又川沿いを歩いてみましたが両方を入れて写真を撮るのは無理みたい。

そこでひらめいたのは、田んぼに水を張った時期に来て、田越しに崩落崖を撮れば一応“水景色”になる。地元の方に田植えの時期を尋ねるとGWの頃とのことで、令和3年5月下旬の天気の良い日に現地に行き、水を張った田んぼ越しに牛ヶ峰山とその崩落崖を撮影しました。それが写真-1です。令和3年の梅雨入りは、例年に比べ異常なほど早くて少し焦りましたが、梅雨の中休みの快晴の日がいい写真が撮れました。



写真-9 シライツソウ

シライツソウ（白糸草）

シュロソウ科シライツソウ属の野草の多年草。名は糸屑を束ねたような花の姿に由来する。根茎はごく短く、ときに小規模な株立ちになり、根生葉をロゼット状に広げる。花期は4～7月。細長い花茎を直立させ、高さは15～50cm程になる。花は穂状で下から順に咲く。真っ白なブラシが立ったような花姿を見せ香りもよい。涼しげな花姿が愛でられる山野草で、茶花として好まれてきた。シワガラの滝に向かう山道の脇で3株発見。

【参考資料】

- 1 『但馬の情報誌 T2 Vol.87～裏路地探検』 公益財団法人但馬ふるさとづくり協会 平成 25 年 7 月
- 2 『技術ノート No.36 特集：東京の斜面と災害』 (社)東京都地質調査業協会 平成 16 年 2 月
- 3 『防災基礎講座：斜面崩壊・地すべり』 国立研究開発法人防災科学研究所 HP
- 4 『応用地質 Q&A 中国四国版』 日本応用地質学会中国四国支部 HP
- 5 『但馬百科事典～大蛇と洪水の伝説が残る山「牛が峯」』 公益財団法人たんしん地域振興基金
<https://tanshin-kikin.jp/tajima/275>
- 6 『但馬の民話〈2〉伝説』 加芝輝子 昭和 58 年 11 月
- 7 『平成 3 年度地すべり対策報告書(海上地区)』 浜坂土木事務所 平成 3 年 12 月
- 8 『海上地すべり対策事業報告書』 浜坂土木事務所 平成 7 年 3 月
- 9 『神代杉』 新温泉町 HP
https://www.town.shinonsen.hyogo.jp/page/?mode=detail&page_id=e6e3cb5add0d316f8c7cae6a3e6203ec
- 10 『兵庫県地質図』 兵庫県土木部 平成 8 年 3 月
- 11 『二方郡、円仁、もぐさ、放射性炭素年代測定、シライトソウ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：令和 3 (2021) 年 9 月 『ひょうご水百景』 No.132

改訂：令和 8 (2026) 年 7 月 『ひょうご水百景』 No.132